

## 武蔵野日曜集会

## 主キリストの愛

――ヨハネ伝第13章1～15節――

1995年6月18日

小池辰雄

極みまで愛する 天来書 贖いの関係 絶対無条件の恵み 決定的な関わり

## 【ヨハネ13・1～15】

1 過越<sup>パスカ</sup>のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れ<sup>きた</sup>るを知り、世に在る己の者を愛して極<sup>きわみ</sup>まで之を愛し給えり。2 夕餐<sup>ゆうげ</sup>のとき悪魔、早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを売らんとする思いを入れたるが、3 イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしことと、己の神より出でて神に到ることとを知り、4 夕餐より起<sup>た</sup>ちて上衣<sup>うわぎ</sup>をぬぎ、手巾<sup>てぬぐい</sup>をとりて腰にまとい、5 ついで盥<sup>たらひ</sup>に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏<sup>まと</sup>いたる手巾にて之を拭<sup>ぬぐ</sup>いはじめ給う。6 斯てシモン・ペテロに至り給えば、彼いう『主よ、汝わが足を洗い給うか』7 イエス答えて言い給う『わが為<sup>な</sup>すことを汝いまは知らず、後に悟<sup>のち</sup>るべし』8 ペテロ言う『永遠に我が足をあらひ給わざれ』イエス答え給う『我もし汝を洗わずば、汝われと関係<sup>かかわり</sup>なし』9 シモン・ペテロ言う『主よ、わが足のみならず、手をも頭<sup>かしら</sup>をも』10 イエス言い給う『すでに浴したる者は足のほか洗うを要せず、全身きよきなり、斯<sup>か</sup>く汝らは潔し、されど悉<sup>いっさい</sup>とくは然<sup>しか</sup>らず』11 これ己を売る者の誰なるを知りたもう故に『ことごとくは潔からず』と言い給いしなり。

12 彼らの足をあらひ、己が上衣をとり、再び席につきて後いい給う『わが汝らに為したることを知るか。13 なんじら我を師また主となう、然<sup>しか</sup>か言うは宜<sup>うべ</sup>なり、我は是<sup>これ</sup>なり。14 我は主また師なるに、尚<sup>なお</sup>なんじらの足を洗いたれば、汝らも互いに足を洗うべきなり。15 われ汝らに模範を示せり、わが為しごとく、汝らも為さんためなり。

## ●極みまで愛する

1 過越<sup>パスカ</sup>のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れ<sup>きた</sup>るを知り、世に在る己の者を愛して極<sup>きわみ</sup>まで之を愛し給えり。

「過越<sup>パスカ</sup>」というのはあの出エジプトのことです。イスラエルの民は罰せられないで過<sup>すぎ</sup>ぎ越<sup>こし</sup>



されたから、「過越」という。キリストは、自分が十字架で処刑されて犠牲の死を、贖罪の死を遂げて、父のもとへ行くことはもうあらかじめ御存知です。それがこの

「イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り」

ということです。「己の者」とはイエスの本当の弟子ということ。それを愛して極みまで愛した。キリストの愛が、顧み<sup>かえり</sup>の愛がその弟子たちに伝わる。即ちキリストの愛が、愛の生命が入ってくるわけです。キリストみたいなたは相手を愛すると、その愛の生命が相手の中に入るわけです。単なる感情の愛ではない。

「己が生命を捨てる」

とは、

「相手に生命を与える」

ということです。そして、それは今度は霊的な生命として生きるわけです。これはパウロもコリント前書15章等と言っているとおります。

「極みまで愛する」

とは、

「徹底的にそれに愛の生命を与える」

ということです。

<sup>2</sup>夕餐<sup>ゆうぜん</sup>のとき悪魔、早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを

売らんとする思いを入れたるが、

「悪魔」というやつは、旧約からあるけれども、旧約でも新約でも非常に傲慢な霊で神に逆らう。逆らうけれども決して勝てない。我々は悪魔と自分で戦ってはダメです。神・キリストの中に自分を投げ込む。そうすると、悪魔に勝てる。これは我々の戦いの秘訣です。

「自分の信仰があつくなくなったから」

なんて思って、自力でやろうとしたらダメです。本当の他力<sup>たから</sup>なんです。こちらは無力です。イエス・キリスト自身が他力なんです。

「われ何事をも為しあたわず」

と仰った。キリストは父が一切なので、

「自分は何でもない。何も教えているのではない。父なる神が言えということ  
を言ったり、為<sup>な</sup>せということをさせられているだけだ」

と仰った。だから、私は「無」ということを言うわけです。無意、無力ということ。自分の意志がない、自分の力もない。キリストが徹底的にこれをやった。そうすると、神さまの意志と力が入ってくる。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言った。自分が何者でもないという人が「私を見た者は父を見た」と。だから、

「我を見し者はキリストを見しなり」



と、我々が言えなくてはいいけないわけです。

「わがうちなるキリストが見えないか」

と。どうせ我々は相対的な罪びとにすぎませんから、それをどんなにいわゆる自力的に修行したって、たかがしれている。そんなものは問題にしない。

キリストはこのしょうがない者の中に入ってください。キリストの愛というのは力があふれている、力ある愛です。我々を贖い活かすところの愛ですから。普通の人間の愛とはちがう。我々は一人一人が、今もなお霊界に在りたもうところのキリストに極みまで愛されている。一人一人を愛するキリストの愛し方というのは、その方法はみな違う。十把じっぱひとからげ一絡ではない。その人らしくキリストは顧みてくださっている。

ゲーテの『ファウスト』の中に出てくる「メフィストーフエレス」というのが悪魔の出店みたいなやつですけども、結局、メフィストーフエレスはしまいには降参するわけです。

## ●天来書

私は内村鑑三、藤井武の無教会の集会に出ていましたが、無教会では

「十字架、十字架」

と言っているばかりで、聖霊の世界がさっぱり出てこない。無教会のそれまでの信仰は、全く「観念」だとは言いませんけれども、非常に観念が強い。本当の意味で、御霊の力ではなかった。これが無教会のそれまでの歴史の限界だった。これでは聖書は本当に読めてはいなかったことがよく分かった。

エホバの力、キリストの力がこの聖書の中に隠れている。聖書の文字を読みながら、その霊的な力を受け取らなかつたら、読んでいるということにならない。意味ではない。そういう実体なんです。人間が考えだして作ったどんな本も、聖書一卷にはかなわない。これは天来の声、天来の力であるから、天来書なんだ。

3 イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしことと、己の神より出でて神に到ることを知り、

神より出でて神に至る。イエスは十字架の贖罪をとおって、また霊界に入ってしまう。だから、我々にとっては、十字架のキリストと霊界のキリストは分けるわけにいかない。過去・現在・未来の私は十字架でもう贖いとられている。そして、そこには聖霊の力がやってくる。「私の信仰」なんていうものではない。だから私は、

「信仰なんありません、何もありません。無です」

と言う。そうすると、無限無量なものが入ってくる。十字架で無とされている。無を与えられている。罪からはずされている。自我を乗り越えている。超我なんだ。我を、自己を超越して乗り越えてしまう。

讃美歌でよく、



「…したまわん」

とあるが、あれは

「…したもう」

と歌わなければダメです。必ずキリストはそうなさるから、「…したもう」と歌った方が力がくる。

「そうしてくださるでしょう」

ではない。

「必ずそうしてくださいます」

ということ。本当の現実には現在直説法の世界なんです。断定しなければ力が来ない。未来のことであろうとも、全部これは現在化して言わなければダメです。

「神の国は来るであろう」

ではない。

「神の国は必ず来る」

です。私はそれでなければ力がこないから仕方がない。

### ●贖いの関係

4 夕食より起ちて上衣をぬぎ、手巾をとりて腰にまとい、5 ついで鹽に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏いたる手巾にて之を拭いはじめ給う。6 斯てシモン・ペテロに至り給えば、彼いう『主よ、汝わが足を洗い給うか』7 イエス答えて言い給う『わが為すことを汝いまは知らず、後に悟るべし』8 ペテロ言う『永遠に我が足をあらひ給わざれ』イエス答え給う『我もし汝を洗わずば、

汝われと関係なし』

「足を洗う」とは、罪を全部消してしまうことを、「罪を贖う」ことをキリストは意味しておられた。だから、

「我もし汝を洗わずば、汝われと関係なし」

と言われた。キリストと私の関わりは、キリストが贖ってくださいという関係なんです。

「キリストは神の子である」

なんていう事柄を信じたつてどうにもならない。

そういう霊的現実で私はものを言う。そうすると、

「同じ内容だけれども、小池先生が言う」と違う」

なんて言われる。私はその現実からものを言っているから、それは響きが違う。語りながら、その現実から語るのでなかったら、私は空しい。だから、いわゆるお説教でも説明でもない。

「我もし汝を洗わずば、汝われと関係なし」

という、キリストのこの言葉は強い。





「お前を全部贖ってやるから、贖いの関係だ。先生と弟子の関係ではないんだ」と。実に、このキリストの断然たる言葉は読んでいて力がくる。

自分で聖書に食いついてくださいよ。天来の力、天来の光、天来の生命、これを受けとらなかつたら空しい。私は空しいことは嫌いだ。空しいことは要らないんだ。

「小池先生は90歳を越えても、なぜあんなに元気なのか。あれは水泳をやっているからだ」

なんて、そうではない。水泳をやったり、自転車を乗り回したりしているからではない。それは一つの派生にすぎない。私はキリストの力に圧倒されて生きている。天来の力に圧倒されて生きているので、信仰でも何でもありません。

「自分の信仰がどうだこうだ」

なんて、そんなことを考えてません。キリストの力に圧倒されて、それで何でもできるし、人助けもできるし、あんしゅ按手すれば病気が治ったりする。だから、「信仰」なんていう言葉は嫌いだ。ありきたりの概念を乗り越えなければダメですよ。

「我もし汝を洗わずば、汝われと関係なし」

と。これはペテロに言っているのではなくて、私にキリストがそう言っただけでしやる。

「お前を洗ってやっている。贖罪してしまっている。そして、新しい霊的な生命を与えるから」

と。これがキリストの関わりなんだ。もう、平伏して、

「ありがとうございます」

の他には言いようがない。

### ●絶対無条件の恵み

9 シモン・ペテロ言う『主よ、わが足のみならず、手をも頭をも』<sup>10</sup> イエス  
言い給う『すでに浴したる者は足のほか洗うを要せず、全身きよきなり、斯く汝らは潔し、されど悉くは然らず』<sup>11</sup> これ己を売る者の誰なるを知りたもう故に『ことごとくは潔からず』と言い給いしなり。

<sup>12</sup> 彼らの足をあらひ、己が上衣をとり、再び席につきて後いい給う『わが汝らに為したることを知るか。<sup>13</sup> なんじら我を師また主となう、然か言うは宜なり、我は是なり。<sup>14</sup> 我は主また師なるに、尚なんじらの足を洗いたれば、汝らも互いに足を洗うべきなり。<sup>15</sup> われ汝らに模範を示せり、わが為しごとく、汝らも為さんためなり。

「互いに洗いあいなさい」

と。お互いに批評するのではなく、お互いに助け合っていく。

「いいよ、いいよ」



と。人の欠点なんかは見ない。その人の長所を見ていく。プラスの面は見て、マイナスの面は見ない。それが本当の友情だ。

第三者のことをなんのかんの言うのは一番いかん。人間の間を崩していくものは、第三者のことを批評する言葉です。第三者のことを讃めるのはいい。けれども、なんのかんの言うことは人間関係を崩す。言いたければ、面と向かって一対一でものを言った方がいい。

「ああそうか、それは悪かったね。いやそれは誤解だよ」

と、何とでもお互いに言い合うことができる。第三者のことは言う必要がない。人間関係は、それでなければ本当の意味で続かない。

それは「敬天」がないと、そういうことになる。「敬天」があるから「愛人」となる。敬天という言葉よりもっと大事なものは、天来の力が来るからです。西郷南洲は、中国からきている「景教」に、聖書が東方に伝わったものの流れに何かで接したのではないかと思われるくらい、福音的なものにぶつかっているらしい。

支那では「天」という言葉は非常に大事な言葉です。これは自然科学的な天ではない。霊界の、霊的な天のことです。「天国」というのは素晴らしい言葉だ。パラダイスです。

私たちはキリストに罪の贖いをして洗っていただいた。だから、これが関係かかわりです。キリストの洗いかたは徹底してますから、罪を完全に我々は贖いとられている。

「こつち側がどうであるこうである」

は問題でない。無条件の恵みです、力ある恵みです。そこには無を、我無き世界を、無我の世界をいただいているわけです。キリストだけがここに生きてくださる世界、キリストが中に入ってくださいる世界です。我々一人びとりにキリストは降臨したもう。こつち側のいかにに関わりなし。絶対無条件の恵みだから、平伏して受けるだけです。これは力が来てしようがない。ありがたくてしようがない。

### ● 決定的な関わり

太陽の光もキリストの光にはかなわない。ゲートルは亡くなる二週間前に、

「太陽とキリストに私は無条件に感謝する」

と言った。さすがはゲートルだ。

「キリストは大変なただ。自然的な人間としては太陽を、霊的な人間としてはキリストを」

と。そんなことを言う文人は、夏目漱石といえども日本にはいない。

「我もし汝を洗わずば、汝われと関係なし」

これは大変な言葉です。キリストの関係は、キリストと私たち一人びとりの関わりは正にこれなんだ。決定的なんです。決定的な関わりです。「であろう」なんていうのではない。正に「なり」の世界です。



ペテロは、キリストとのこの会話をみていると、見当の違ったことを言っている。ペテロというのはしょっちゅう躓いたり転んだりしている。パウロはダマスコ途上でひっくり返されたから、パウロというのは大変だ。新約聖書の中心は、キリストを除いては、パウロです。ヨハネはまた別の意味で大事な人です。ヨハネはスーツとしているが、パウロは非常に電光石的なんだ。パウロ、ヨハネ、ペテロはそれぞれですけど、どれがいいわいと言っているのではない。私は感激性があるものだから、感激すると話が話にならなくなってしまうのではない。

とにかく、大事なのは旧約の預言書と、新約は全部だけれども、特に福音書です。これは単なる書物ではない。ナポレオンがセントヘレナに流されて聖書を読んだときに、

「これは本ではなかった。活きものだ。聖書は活きものだ、自分は本当にこれに打たれて降参した」

と言った。さすがはナポレオンだ。彼は英雄だけれども、この聖書には降参した。彼はそこで初めて聖書の世界に入ったわけだ。

とにかく、第一級のことを相手に、楽しく勇ましく進んでいきましょう。

